慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岩間一弘著『上海近代のホワイトカラー：揺れる新中間層の形成』
Sub Title	Kazuhiro Iwama, "White collar workers in modern Shanghai : the formation of an unstable new middle class"
Author	戸部, 健(Tobe, Ken)
Publisher	三田史学会
Publication year	2013
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.82, No.1/2 (2013. 4) ,p.227- 233
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20130400-0227

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

岩間一弘著『上海近代のホワイトカラー―揺れる新中間層の形成―』

戸部　健

一

日本上海史研究会を中心に『上海史―巨大都市の形成と人々の営み―』（東方書店、編者は古厩忠夫氏と高橋孝助氏）が出版されてからはや二〇年近くがたったが、日本における上海史研究の勢いは止まるところを知らない。そのなかにあって、本書の著者である岩間一弘氏の存在感は近年になりいっそう際立ってきている。二〇一一年に本書を出版したのを皮切りに、二〇一二年五月には上記『上海史』以来となる上海史の概説書である『上海―都市生活の現代史―』（風響社、金野純氏・高綱博文氏との共著）を刊行、加えて同年九月には主に日中戦争期以降における上海の大衆社会について論じた『上海大衆の誕生と変貌―近代新中間層の消費・動員・イベント―』（東京大学出版会）をも上梓している。紛れもなく現今の日本における上海史研究の牽引者の一人と言えよう。

以下では、これら業績のうち『上海近代のホワイトカラー―揺れる新中間層の形成―』を取り上げ、その内容について簡単に紹介するとともに、若干の感想を述べたい。

二

本書の構成を以下に示す。

序　章　上海近代への視点

第一章　ホワイトカラーの生活状況と階層認識

第二章　人事記録にみるホワイトカラーの経歴・家族・余暇
第三章　商業教育の中国化・大衆化と新中間層形成
　　―国立上海商学院を中心に―
第四章　科学的管理の導入とホワイトカラーの抵抗・服従
　　―一九三〇年代の康元印刷製罐廠と商務印書館を中心に―
第五章　主婦・職業婦人の誕生とマスメディア
結　論　ホワイトカラーの階層意識と生活実態のずれ

序章では、本書の課題、本書の主な対象である新中間層についての定義、上海を考察地域に選んだ理由、本書の近代に対する認識、本書で明らかにされる上海のホワイトカラー像についての概要（「日常生活と社会意識」、「公共性と社会統合」、「政治参加と国民統合」というテーマに分けて）、新中間層研究における本書の位置、使用する史料についての説明などがなされている。ここで著者は、新中間層を「精神・頭脳労働に従事する勤め人とその家族」で、「高い技術水準を有する一部の熟練労働者も含まれる」（一四頁）と定義し、本書の課題を「両大戦間期の上海におけるホワイトカラーの台頭と新中間層の形成を、日常生活に即した視点から具体的に描き出し、中国都市社会の近代化・近代性を論じ」（六七頁）ることとしている。ここで強調されているのが、「日常生活に即した視点」から新中間層の形成を描き、それによって中国都市社会の「近代化・近代性」について論じること、具体的には上海の近代化・近代性の特徴を明らかにするということである。なお、上海を考察対象とした理由については、東アジアにおける最大の経済都市であることと、新中間層の規模が中国のなかで突出していたことを挙げている。

第一章では、一九二〇～四〇年代の上海で、ホワイトカラーをめぐってどのような議論や調査が行なわれたのかを整理している。まずは、両大戦間期の中国で新中間層がどのように捉えられていたのかを、「小資産階級」（プチブル）というタームに対する国民党（およびその改組派）と共産党の認識という角度から検討する。続いて、中国共産党職員運動委員会の顧准および共同租界工部局の工業社会処による報告書から、中下層職員およびエリート職員の生活状況について考察している。最後に、日中戦争後における都市中間層再評価の動きについても

言及している。

第二章では、民国期のホワイトカラーの経歴・家族の実態を解明するために、まず上海商業儲蓄銀行・上海女子商業儲蓄銀行の人事記録から各行のデータを整理・分析している。その結果、男性行員の八割近くが中等水準以上の教育を受けていたこと、女性については全員が中等水準以上の教育を受けていたことなどが明らかにされている。他方、家族については、行員の多くがある程度の学校教育を受けた女性と結婚し、彼女らを専業主婦にすることを望んだこと、行員世帯のおよそ四割以上が夫婦家族・核家族であったことなどが述べられている。さらに、ホワイトカラーの余暇の実態を探るために、太平保険公司と新新公司の職員のデータについても同様に検討し、会社によって余暇のあり方が大きく異なることを指摘している。

第三章では、国立上海商学院の事例から、両大戦間期におけるホワイトカラーの台頭と商業教育の成立・展開との関係について論じている。そこでは、両大戦間期以降、教材やカリキュラムの中国化・現地化が進んだこと、学校で商・工業を学び、卒業後に大組織に雇われてホワイトカラーになるという新たな出世の経路が上海でも確立したこと、商・工業学校の卒業生のなかには学業と職業、学生生活と職業生活の相違を実感しながら、仕事と自己実現のジレンマに苦しむ者も多かったこと、商業教育は当初より「発財教育」などと批判されることが多かったこと、それに対し、商業教育の推進者たちが、対外的危機を抱える時代にこそ商業教育が国家・国民にとって有益であることを主張し続けたことなど興味深い指摘がなされている。

第四章では、上海近代における社会管理の進展について、欧米の科学的な労働管理が企業に導入されるまでの紆余曲折と、導入後における職場秩序の変化を中心に考察している。最初に、科学的管理が中国にどのように導入されたのかを概観し、あわせて科学的管理に反発する労働者の姿も描いている。次に、康元印刷製罐廠と商務印書館の事例をもとに、科学的管理導入に向けた試行錯誤の様子を検討している。そして、以上の成果をもとに最後に、科学的管理が労働の合理化や効率化を進めたこと、それがあらゆる従業員を代替可能な「大衆」的人間に変えていったこと、ただしそれによって職務と職位が細分化した結果、事務組織の重層化・肥大化が進むなど、非合理的な面もあったとの主張がなされている。

第五章では、中国近代において主婦と職業婦人がどのように出現したのか、また主婦と職業婦人が家庭・職場・社会にどのように関わったのかを、当時の上海のマスメディアにおける言説を中心に検証している。その成果として、女性の自立問題が一九二〇年代以降「社会主義」（後述）や革命との関係で捉えられるようになっていったこと、民国期上海の主婦と職業婦人が、家事・育児に奔走する勤勉な主婦像と、気ままに優雅な消費生活を謳歌する主婦像との、対照的な二つのイメージで捉えられたこと、その背景として新中間層内部で生活水準に大きな格差が生じていたこと、他方中間層女性のなかに結婚生活に対して高い理想を抱く者がおり、そのために両大戦間期の中国において晩婚化が進んだことなどが明らかにされている。

上海の新中間層に対する以上の考察を通して結論では、序章での問題提起に応えて主に以下の二つの点につき議論がなされている。①中国の近代化と近代性の中国化：著者は近代化を「類似性が増していく過程」であるものの「差違が消失していくのではなく、差違が分かりづらくなっていく過程」であったと主張する。そして近代を「地域・集団・個人による差異が、当然のように存在するのではなく、むしろ様々な理由から意識的に創り出されることの増えた時代」（三五七頁）と捉える。それゆえ「日常生活の場面において実体験された近代性とはしばしば、グローバル化とともにローカル化が進んだグローカルな状態であった」（三五八頁）とし、それを「近代性の中国化・上海化」としている。②格差へのまなざしと揺れる新中間層の形成：同じホワイトカラーを自認する人びとの間でも著しい格差が存在しているなど、新中間層という階層が不安定であったとする。それゆえ、ホワイトカラーのなかには「社会主義」という考え方に引きつけられる者もいたが、彼らが体験した「社会主義」とは多分に中国化された「社会主義」であり、彼らの夢見た大同・平等社会を作り出すものではなかったことが指摘されている。

三

本書の評価すべき点としてまず挙げるべきは、日本語（しかも平易で読みやすい）で書かれた近代中国のホワイトカラーに関する本格的な研究であることであろう。このテーマは近年欧米や中国、台湾を中心に研究が盛んだが、本書は、そうした研究成果を貪欲に取り込み、さ

らに深化させている。特徴的なのは、本書が教育・企業管理・女性・家庭などという側面からホワイトカラーの経歴や日常生活のあり方に迫るという手法をとっていることである。これにより読者は、上海におけるホワイトカラーの具体的なあり方やその独自性、さらには彼らの上海社会全体における位置づけについて明確な理解を得ることができるようになっている。確かに、上海の人口全体に占めるホワイトカラーの割合は大きいとは言えない。しかし、近代上海において彼らが果たした役割は非常に大きく、上海史を総体的に理解する上で決して無視できない存在である。従って、そうした人々について纏まった知識を提供してくれる本書の功績は極めて大きいと言えよう。

次に注目したいのは、著者が広い視野と狭い視野とを織り交ぜながら新中間層について検討し、そのことが新中間層の内実を解明する上で有効に作用している点である。例えば広い視野からは、新中間層全体の動向を、一九二〇年代から一九四〇年代という長いスパンの中で、かつ新中間層と旧中間層との関係、および資本家階級と労働者階級との関係にも言及しつつ論じている。本書の結論の一つである新中間層の二極化という事実は、これによって導き出されたものと言える。また、狭い視野からは、ホワイトカラー個々人のディテールを、様々な角度（人口・収入・教育水準・家族・余暇・ジェンダー、さらに彼らの心情や他人からの評価など）から明らかにしている。ここでは、各種統計・人事記録（主に上海市檔案館所蔵の檔案史料）・新聞・雑誌などそれぞれ性格の異なる史料をバランスよく調合し、かつ写真や漫画を効果的に取り混ぜることで、ホワイトカラー個々人の像をヴィヴィットに再現することができている。

もう一つ強調しておきたいのが、本書の教育社会史研究としての意義である。本書は全体を通して教育に関連する記述が多く含まれているが、とりわけ第一章から第三章にかけてそれが多い。そのうち第二章での銀行員およびその家族の学歴に関する記載や、第三章での商業学校の学生と就職との関係についての記述は極めて興味深い。そのほか、第五章でも職業婦人と学歴との関係についての言及がなされている。学歴および卒業生の進路などを検討することは教育社会史研究では基本的なことであり、中国近代史の分野においてもそれらに注目する研究が増えてきているが、日本や欧米の動向を考察対象とする教育社会史研究に比べれば依然として発展途上の状

態と言える。そのなかにあって本書が上海のホワイトカラー層の教育的背景について明らかにしたことは注目に値する。本書で明らかにされた成果は、国内外の各都市との比較を通して今後さらに大きな意味を持ってくると考える。

四

最後に、本書を読んだ上で感じた疑問点についていくつか述べたい。ただ、本書に対する論評はすでに菊池敏夫氏（『中国研究月報』七七三号）や福士由紀氏（『現代中国』八六号）、高橋俊氏（『史学雑誌』一二一編六号）など多方面からなされている。ここでは重複を避けるため、主に筆者の専門（近現代天津史、教育社会史）に引きつけたかたちでコメントをしていく。それゆえ、視点の偏りは避けられない。ご了承いただきたい。

第一は、本書で明らかにされた上海のホワイトカラーのありようは、中国全体においてどのように位置づけることができるのかという点である。本書七頁にあるように、上海における新中間層の規模が「中国のなかでは突出していた」ことや、新中間層の大多数が「外資系企業と民間企業の職員」によって占められていたことは確かに上海の特徴であろう。ただ一方で、新中間層の人口規模が上海よりも小さかったり、外資系企業や民間企業の存在感が上海に比べると薄かったりする都市（公務員の存在感のほうが大きい都市など）についてはどのように考えるべきであろうか。また、例えば天津のように、女性の社会進出が相対的に遅れていた都市のホワイトカラー像は、上海のそれとどのように違うのだろうか。[1] さらには、新聞や雑誌などを通して伝えられた上海のホワイトカラーの姿は、中国の他の都市においてどのように受け入れられたのであろうか。近代中国における上海が持った意味を明らかにする上でも、それ以外の都市の特徴をあぶり出す上でも、こうした問題を比較史的に研究する必要があるように思える。

第二は、近代上海の、特に新中間層にとって学歴が持っていた意味についてである。本書は、ホワイトカラーの多くが中等水準以上（多くが中等教育）の教育を受けていたことを明らかにしている。また、高学歴であるほど給与の額も高いことが指摘されている。筆者が思うに、こうした情況は、上海において中等教育が広く普及していたことと深く関連しているのではないだろうか。実際、一九二〇～四〇年代の上海における総人口に対する中学

生数の割合は、同時期の他の都市に比べ突出して大きかった。ただ、ここで疑問なのは、中等教育の学歴と就職との関係である。本書は、ホワイトカラーの人々の多くが中等教育卒業の学歴を持っていたことについて言及しているが、一方でそうした学歴が彼らの就職の際にどのような効果を及ぼしたかについては十分に述べているわけではない。むしろ、就職に当たっては、一般的に縁故関係にもとづく人材の採用が行われていたとも述べている（一九六頁）。そうであるならば、就職において学歴が持っていた意味はどのようなものであったのだろうか。このことは言い換えれば、当時の上海において学歴社会がどの程度形成されていたのかということである。やはり国内外の事例との比較が必要であろう。

五

以上、本書の内容と意義、そして疑問点について述べた。疑問点については、本書の内容に対する疑問というよりもむしろ、天津の教育社会史を専攻する筆者自身が取り組むべき課題であると言える。それらを着想するきっかけを与えてくれた本書に感謝したい。

本書でも述べられているように、両大戦期を中心に増加していった上海の新中間層は、その後の動乱などの影響もあり徐々に分解していき、最終的には解体していった（一五～二二頁）。しかし、改革開放後になると沿海部を中心に新中間層は再び形成されはじめ、現在に至っている。無論、「解放」の前後でホワイトカラーのあり方に大きな違いがあるが、本書の成果は現在活躍している中国のホワイトカラーのありようを認識する上で様々なヒントを与えてくれるだろう。その意味で、本書は中国近代史研究としてだけでなく、現代中国研究としても意味があると言える。

（研文出版、二〇一一年、四二九頁＋三七頁、七〇〇〇円）

註

（1）天津の人口についてまとめた李競能主編『天津人口史』によると、例えば一九三八年時点ですら女性人口全体に占める就業者の割合は六・七％であった。また、一九四二年になってもそれは九％までしか上昇しなかった（李競能主編『天津人口史』天津：南開大学出版会、一九九〇年、四五三～四五六頁）。